
氷鮑鳴海の事件ファイル

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷鮑鳴海の事件ファイル

【Nコード】

N7647B

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

東大目指して三浪の男・氷鮑鳴海は、公園で成瀬川理奈と言う少女と運命的な出会いを果たし、事件に遭遇する・・・。

++プロローグ++
(前書き)

主演：氷^{ひがの}鮑^の 鳴海
ヒロイン 成瀬川 理奈
なるせがわ

++プロローグ++

都内にポツンとある、人っ子一人見当たらない小さな公園のベンチに、一人の青年が座っていた。

彼の名は氷鉋^{ひがの} 鳴海。年齢は21。東大目指して3浪の可哀想な青年である。

そんな鳴海の下に、メガネを掛けた三つ編みの女の子がやって来た。

「此処、宜しいかしら？」

彼女はそう言って、鳴海の横を指した。

鳴海は横に手を伸ばし、鉋を退かした。

少女は、その空いた席に座ると、自分の鉋から東大の受験票を取り出し、溜め息を吐いた。

「不合格かぁ・・・」

少女はそう呟くと、受験票をビリビリ破いた。

「あんた、東大目指してたのか？」

その突然の問いに少女は驚いた。

「何で知ってるんですか？」

「その破いた受験票、東大のだろ？それにさっき、自分で『不合格』って言っただけだ」

すると、少女は顔を赤く染めた。恥晒しである。

「そんな恥じる事無いって。」

俺も、東大目指してたんだけど、今回もまた落ちて、これで三浪さ。

所であんた、名は？」

「^{なるせがわ}成瀬川 理奈」

「そうか。俺は、氷鉋 鳴海だ」

そう、これが彼ら二人の、最初の出会い。

この後、彼らが事件に巻き込まれる事など、彼らには知る由も無

い。

++プロローグ++（後書き）

氷鮑 鳴海について。

鳴海の苗字である「氷鮑」は、某作者が書いた小説の登場人物から取らせて頂きました。

「鳴海」は、「スパイラル」推理の絆」の鳴海 歩からです。
え？成瀬川？

これは、赤松 健原作「ラブひな」の成瀬川 なるから取った。
因みに、容姿が髪の色を除いてなるそっくり。

氷鮑を修正し、氷鮑にしました。

File 01・須々木ゼミナール殺人事件！

鳴海は、都内某所に存在する予備校、須々木ゼミナールに通っている。

その理由は勿論、東大合格の為である。

その鳴海に、メガネを掛けた男が声を掛けた。

「おつす。鳴海、宿題見せてくれよ？」

「山路、お前また忘れたのか？」

「そうなんだ。だからお前の写させてくれよ」

「断る」

「そ、そんな事言つなよお」

その時、金色で長い髪の少女が、山路に声を掛けた。

「アンタね、宿題くらい自分でやんなさいよ」

「五月蠅え、お前には関係無いだろ」

山路はそう言いながら、少女の方を振り向いた。

「何よ？」

「全く、これだからガリ勉はム力つくんだ」

バンッ！——少女は机に手を着き、椅子を倒して立ち上がった。

「な、何だよ？やるのか？」

と、構える山路。

しかし、少女はこっちに来ず、走って教室を出て行ってしまった。

「泣かしたな」

「な、何だよ？俺は何も」

「『ガリ勉』言つたろ？」

「何でそれで泣くんだよ？」

「さあな。本人に訊いてみたらどうだ？」

「何で俺がつ！？」

と、その時、甲高い悲鳴が聞こえて来た。

教室は一斉に静まりかえる。

鳴海は、悲鳴の下へ駆け出した。

「何処行くんた鳴海!？」

しかし、その言葉は彼にはもう届かない。

鳴海は女子トイレに來ると、そつとドアを開けて中を覗き込んだ。すると、奥の方で先程の金髪の少女が、腰を抜かしてしゃがんでいた。

「どうしたんだ？」

鳴海は完全に中に入ると、その少女に声を掛けた。少女は口をパクパクさせ、正面の個室を指差した。

鳴海は、恐る恐るその個室に近付き、中を覗く。

「!」

驚いた鳴海は、少女と同じ様に腰を抜かしてしまった。目の前には、体中を滅多刺しにされ、全身真っ赤に染まった女性が、便器を背にして寄り掛かっている。

「と・・・・・・取り敢えず、110番だ」

鳴海はそう口にする、携帯電話を取り出して通報した。

「さてと、死体をちよつと弄りますか」

鳴海はニヤリと笑うと、白い手袋を出してはめた。

「な、何するの？」

「死体を調べるんだ」

鳴海は少女にそう言つて、死体を調べ始めた。

（成る程、心臓を一突き。ほぼ即死つて所か。

殺害されてから1〜2時間程経つてるな）

鳴海は腕時計を見た。

（10時半つて事は、死亡推定時刻は8時半から9時半頃か？）

File 02・被害者

鳴海が通報して数分、それは来た。

「こら、死体に触らない！」

鳴海はやって来た刑事に、金髪の少女と共に女子トイレから追い出された。

その二人の前に、40代半ばの男が現れた。

「第一発見者は君達かな？」

そう訊ねたのは、高宮^{たかみや} 繁治。警視庁捜査一課の警部だ。

「いえ、最初に発見したのは私です。彼は後から」

と、少女は鳴海を差した。

「ああ、教室にいたら悲鳴が聞こえてな。それで来てみたら、身体中を滅多刺しにされた被害者と腰を抜かしたこいつがいたって訳だ」
成る程——高宮はそう発すると、次の質問をした。

「現場に来て、おかしな所とかはあったかね？」

「と、言いますと？」

「気になる点だよ。普段と何かが違ったとか、怪しい人物を見たとかね」

その発言に鳴海は一瞬考えて、

「特に無かったですね。そう言うのは」

「そうか・・・」

高宮がそう呟いた時、女子トイレの中から女性が出て来た。

「高宮警部、被害者の免許証を見付けました」

女性はそう言って、高宮に被害者の免許証を渡した。

高城^{たかぎ} 真理——免許証にはそう書いてあった。

それを見た鳴海は、ボソツと呟いた。

「これウチの担任」

「何？それなら話が早い。殺された高城さんはどんな人なんだね？」

「どんな人って、優しくて良い人でしたよ。恨まれる様な事なんて無いと思います」

「そうか。ならこれは事故死」

と、手帳にボールペンで書き付ける高宮。

「違うでしょ高宮警部！あなたは某アニメの刑事さんですか！？」

（やれやれ・・・大丈夫かこれで？）

先が心配になった鳴海は、

「刑事さん、一つ情報を」

その言葉に、高宮と女刑事は耳を傾ける。

「殺された高城先生なんですが、僕が調べた所、死後1〜2時間程経っています。死因は心臓を一突きされた事によるショック死。その後、犯人によって全身を切りつけられたのでしょう」

あなた何者？——女刑事はそう言いたそうな顔をした。

「何故そんな事が解るんだね？」

その問いに女刑事は答えた。

「この子、さつき遺体に触れてたのよ。大方、おおかた証拠の隠滅でも図ろうとしてたのね」

「て事は君が犯人か」

高宮はそう言って、手錠を取り出した。

（も、もしかして、疑われてる？）

ガシャンッ！——今、鳴海の手に手錠がはめられた。

F i l e 0 2 ・被害者（後書き）

突如誤認逮捕されてしまった鳴海。
彼の運命は如何に！？

File 03・容疑者は鳴海!?

警視庁捜査一課、取調室。

鳴海は今、そこで取調を受けている。

「ええと、先あなたの名前を教えて貰えるかしら？」

そう訊ねたのは、先程の女刑事だ。

（こいつ、気に入らねえ・・・）

と、鳴海は机に片足を乗せた。

「下ろしなさい」

しかし、鳴海は下ろさなかった。

「あなた、私をバカにしてるの？」

「カツ丼出せ」

「はあ？」

「取り調べと言ったらカツ丼だろ？出してくれたら下ろしてやるよ」
「取り調べでカツ丼は出ません。そんな物が出るのはマンガだけです。」

それより早くあなたの名前を」

鳴海はやれやれと思いつつ、軽く自己紹介した。

「氷鉋 鳴海、21歳。探偵だ」

「歳は結構。で、自称探偵が何故あそこに？」

その問いに鳴海は、こう言った。

「その前に貴様の名前を教えて貰おうか？」

「た、高山^{たかやま} 涼子よ。それで、あなたあそこで何してたの？」

「遺体を調べてたんだ」

バンッ！——高山は机を叩いて立ち上がった。

「あなたね、探偵って言っても一般人なのよ？一般人が遺体に触れるなんて非常識にも程があるわ！」

と、身乗り出して怒鳴る高山。

「お前煩いよ。頭にガンガン響くだろ？」

高山はそう言われ、ムツとしたが、我慢して座る事にした。その時、高宮が血相を変えて入って来た。

「退け！」

高宮は高山を吹っ飛ばした。

飛ばされた高山は、背中を壁にぶつけ、蹠踉めいた。

「申し訳ありませんでした！」

高宮は頭を下げた。

「たつ、高宮警部！？」

「氷鉋さん、貴方には本当に申し訳ない事してしまいました。部下の高山も反省している事ですし、許してやって下さい」

と、高山に向き直り、

「高山君、彼にカツ井とお茶を持って来なさい」

「何故ですか？」

「高山君、彼はね、警視總監である氷鉋^{ひがの} 隆一さんの息子さんなのだよ。君はそんな彼を犯人扱いしたんだ。これがどう言う事か分かるかね？」

「えっ！」

高山は高宮の発言に驚いた。

「ささ、氷鉋さん。こちらへどうぞ」

高宮はそう言って、鳴海を別の部屋へと案内した。

F i l e 0 3 ・ 容 疑 者 は 鳴 海 ！ ？ （ 後 書 き ）

もう犯人出てるけど、読者の皆さんは解るかな？

File 04・殺害された恋人

鳴海が高宮に案内されたのは、捜査一課九係の狭い一室。

「あれ、その子は？」

と、若い刑事が高宮に訊ねる。

「この子は氷鉦 隆一さんの息子さんだ」

高宮がそう言うのと、鳴海はお辞儀した。

「氷鉦 鳴海」

と、小さな声で名乗る鳴海。

「へえ、なるみ君か。女の子みたいな名前だね」

と、彼をからかう刑事。

「それより涼子さんは一緒じゃないんですか、警部？」

「彼女はカツ井買いに行ってるよ」

そんな事より——高宮がそう言い掛けた時、鳴海が遮る様に言葉を発した。

「高宮警部、事件の捜査状況を教えて下さい！僕が取り調べ室に入られている間にある程度進んでるんですよね？」

「おお、そうじゃった。進んでいるよ。」

立ち話もなんだから、ソファにでも座って話すかね」

高宮はそう言うと、鳴海をソファへと座らせ、茶を煎れた。

「先ず、これを見てくれたまえ」

高宮はそう言って、ある一枚の写真を取り出した。

そこには、一人の男性がこっちに笑顔を向けているのが写っていた。

「これは？」

「こいつは、山路 敏哉。被害者の交際相手だ」

高宮は一旦そこで区切ると、

「否、交際相手だったと言った方が良いか」

と、言い直した。

「どう言う事だ？」

その問いに、高宮は深刻な表情をしてこう言う。

「殺されたんだよ。一年前にな」

「なっ!？」

高宮は、鳴海が驚くのも無視して話しを続けた。

「状況は、今回と同じ滅多刺しだった。恐らく、同一犯の犯行と見て間違い無いだろう」

「現場は何処なんだ？」

「北海道だ」

「北海道か……何っ、北海道!？」

鳴海は驚き、大声を張り上げた。

「声がでかいよ」

「すいません」

「道警には連絡を取ってある。行って、詳しく話しを聞いて来い」

高宮はそう言うのと、20万程入った封筒を取り出し、鳴海に渡した。

「これは？」

「交通費だ。刑事局長さんが君の為に出してくれたものだ」

「え、親父が？」

「まあ、何だ？それ使って行って来い」

File 05・北海道

明くる日、鳴海は、北の最果て北海道の新千歳空港にやって来た。
「結局来ちまったぜ、北海道に・・・」

鳴海がそう呟いた時、何処からか聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「氷鮑さん」

その声は、理奈の物だった。

「えっ？」

鳴海は辺りを見回した。

「何処見てるんですか、後ろですよ」

その言葉に、鳴海はそつと振り向いた。

するとその先には、メガネを掛けた三つ編みの理奈が立っていた。

「あんだ、この間の」

何故此处に？——と、疑問を浮かべる鳴海。

「私の家、こっちの方なんです。」

それにしても、昨日は大変でしたね」

「何の事だ？」

「もう、惚^{とほ}けちゃって。事件ですよ、予備校で起きた」

「何であんだそれを？」

「フフ、それは何れ解ります」

理奈はそう言つと、鳴海の手を引いて歩き出した。

「お、おい、何処に行くんだよ？」

「私の家。旅館探すより手っ取り早いですよ？」

「い、良いって」

「遠慮しないで下さい」

そうこうしている間に、二人は付近の自転車・バイク一時預かり所にやって来た。

「此处、駐車場だぞ？」

「良いの良いの」

理奈はそう言っと、グレーのCBR1000RRの前で止まった。
「はい」

と、理奈はCBR1000RRのハンドルにぶら下がっているヘルメットを鳴海に渡し、コンタクトに付け替えると、シート下の収納スペースからヘルメットとゴーグルを出して装着した。

キュルルッ、ブォーンッ！——理奈はCBR1000RRのエンジンを掛け、後ろへ引いて出した。
「乗って？」

と、CBR1000RRに跨る理奈。

「あんた、バイク乗るのか？」

「私が乗っちゃいけないのか？」

「否、そう言う訳じゃない。ただ、女の子がバイクに乗るのって珍しいなって思ってたな」

「そうか……。どうでも良いが早く乗りな！」

理奈はそう言って、アクセルを入れた。今にも出発したがっている様だ。

鳴海はヘルメットを被って後ろのシートに跨った。

「走るからしっかり掴まりな！」

「あ、ああ」

と、鳴海は理奈にしがみつく。

「ひっ！」

鳴海の手が理奈の胸に触れ、彼女は驚いた。

「バカ、何処触ってたんだよっ！？」

そう言って理奈は、鳴海の手を掴み、CBR1000RRから降りて放り投げた。

「うわっ！？」

放り投げられた鳴海は空中を舞い、背中を地面を打ち付けた。

「っ痛……」

と、体を起こして背中をさする鳴海。

理奈はハツと驚き、慌てて駆け寄った。

「ご、御免なさい氷鮑さん！大丈夫ですか！？」

「いててて、これが大丈夫に見えるかっつうの！」

「私、バイクに乗ると性格変わるんです。本当に御免なさい！」

「そうならそうと先に言え！」

と、理奈を睨んだ。

「そ、そんなに怒らないで下さい。悪いのはもう一人の私なんです
から」バイクおんな

と、理奈は冷や汗を垂らした。

「良いよ、もう……。俺、タクシーで行く」

鳴海はそう言って、タクシー乗り場の方へ向かった。

「ちょ、ちょっと!？」

しかし、その言葉はもう届かなかった。

F i l e 0 5 北海道（後書き）

このペースだと、10話超えちゃうかな？

File 06・あいつと再会、成瀬川旅館

タクシー乗り場に来た鳴海は、タクシーを探した。

（まだ来てねえか）

と、乗り場の椅子に腰を掛ける鳴海。

すると、丁度そこに、タクシーが一台、やって来た。

タクシーは鳴海の前で止まると、ドアを開けた。

鳴海はそのタクシーに乗り込んだ。

「お客さん、どちらまで？」

と、訊ねる運転手。

鳴海は、旅館のパンフレットを出して開き、運転手に示した。

「此处お願いします」

「はい、了解」

と、運転手はタクシーを発車させた。

それから数十分経った頃、鳴海を乗せたタクシーはある旅館に到着した。

表の看板には、成瀬川旅館と書いてある。

鳴海は空港から旅館までの料金を払い、タクシーを降りてその旅館に入館した。

「すみません、部屋を一室借りたいんですが？」

鳴海は、入り口の側にある受け付けの女性従業員にそう言った。

「お部屋ですね？したつけこちらにお名前と住所の記入をして欲しいっしょ」

従業員はそう言って、記入用紙とボールペンを出して置いた。

鳴海は、前に出された用紙に名前と住所を書き記した。

「したつけ、お部屋に案内するからさ、少々お待ち欲しいっしょ」

従業員は用紙とペンを回収するとそう言い残して奥の方へ去って行った。

その直後、

「理奈、お客様をお部屋にお連れして？」

と、先程の従業員の声が聞こえて来たかと思うと、直ぐに戻って来た。

それと同時に、受け付け横のStaff onlyと書かれた扉

から、事件現場で会った少女が出て来た。

「こち・・・っ！」

鳴海の姿を見た少女は驚いた。

「氷鮑さんじゃないですか！」

「そう言うあんたは・・・誰？」

「あら、私の事お忘れになられたんですか？」

少女はそう言うのと、髪を素早く三つ編みにし、眼鏡を掛けた。

「私です、成瀬川 理奈です」

「ぬぁっ!？」

鳴海は驚き、硬直した。

「何アンタ達、知り合い？」

そう訊ねたのは、やはり従業員だった。

理奈は従業員に、

「予備校で一緒のクラスだった」

「えっ、じゃあこの人がアンタの話してた人？」

「うん」

と、理奈は首を縦に振った。

「そんじゃしたっけ、理奈のお部屋に泊まって貰ったら？お友達からじゃえんこ取るのも何か悪いし」

「わ、私の部屋にっ!？」

「そうだべ」

従業員はそう言うのと鳴海に聞いた。

「君もそれで良いね？」

「俺は別に、泊まれれば、部屋は何処でも」

「うん、決まりだべ。理奈、部屋に案内してあげな」

「わ、分かったわ」

理奈はそう言って、頬を赤らめた。

こうして鳴海は、理奈の部屋に泊まる事になった。

File 07・まさかつ!?(前書き)

小ネタ入れてみました。

File 07・まさかつ！？

次の日の朝、鳴海は見覚えの無い部屋のベッドの上で目を覚ました。

隣には、理奈が眠っている。

「そうだ、北海道に来てたんだ・・・」

鳴海は思い出したかの様に呟くと、起き上がってベッドから出た。
「あっ！」

鳴海は自分が真っ裸である事に気が付くと、

（まっ、まさかつ！？）

と、恐る恐る理奈の掛け布団を持ち上げた。

すると、案の定、理奈の真っ裸な姿が現れた。

ゴソ——理奈は寝返りを打った。

（やばっ、目覚ましたか？）

鳴海はその場に佇み、数秒程やり過ごした。

（ふう・・・にしても、何で俺裸なんだ？全く記憶が無え・・・）

と、その時、いつの間にか目を覚ましていた理奈が、鳴海に声を掛けた。

「何時までまっばでいるつもりですか？」

その問いに、鳴海は驚いた。

「うっおおわあっ！」

違うんだこれは！気が付いたらその！って言うかお前もその格好！」

鳴海は理奈の裸を見ない様、慌てて両手で顔を隠した。指の間から片目だけ覗かせて。

クスクス——理奈は笑うと言った。

「氷鮑さんも男ですね。そんなに見たければ手退かして堂々と見れば良いじゃないですか。私は別に気にしませんから」

この時、鳴海は思った。

こいつバカか？——と。

「さ、服着て行きましょう」

「えっ、何処に？」

「決まってるでしょ？警察署ですよ」

理奈はそう言つと、タンスから服を出すと、着衣を始めた。

鳴海はその様子を、頬を赤くしてボーッと見ていた。

「氷鮑さん、頬赤くして、何ーッとなさっているんですか？」

鳴海はその問いで我に返ると、慌てて側にあつた服を着た。

File 07・まさかつ！？（後書き）

男に聞こう。

真っ裸が何だっ！？産まれたままの姿見て何が嬉しいっ！？答えは聞かないけど！

あ、俺？俺はどうも思わん。だって人間、産まれた時は皆裸だろ。そんなの見たって嬉しく無いし。

File 08・怪しい奴

旅館を出ると、二人は駐車場にやって来た。そこには、理奈のバイクが止まっていた。

「成瀬川」

「何ですか？」

「投げ飛ばすなよ？」

グサツ！——理奈は今の一言で傷付いた。

「あ、悪い」

「良いんです。悪いの私ですから」

理奈はそう言って、キーを出してバイクに挿した。

「はい、ヘルメット」

鳴海はヘルメットを受け取った。

カリカリ、ブォーンッ！——理奈はバイクのエンジンを掛け、それに跨ってヘルメットを被った。

鳴海は警戒しながらバイクに跨ると、理奈にしがみついた。

ぶに——鳴海の手が理奈の胸に触れた。

理奈はかあつと顔を赤くした。

「し、下の方を持て」

「悪い」

と、手の位置をずらす鳴海。

「さっきは投げ飛ばして悪かったな」

「もう謝ってもらった」

「あ、あれは別の私だ」

「そうか」

「それはそうと、落ちねえ様すっかり掴まってな！」

理奈はそう言つと、ギアを入れてアクセルを回し、発車させた。その様子を、何者かが車の中から見つめていた。

そいつは、車をゆっくりと発車させると、理奈を尾行した。

（ん、尾行^{つせ}られてる？）

バックミラーを一瞬見た理奈はそう思った。

「どうした？」

鳴海は理奈の様子を察したのか、そう訊ねた。

「私達、尾行らるてる」

「何っ！？」

鳴海は驚き、バックミラーを覗き込んだ。

「成瀬川、そのままスピードをキープしてくれ！どう出るか、見てやろうじゃねえか」

「O・K！」

と、運転に集中する理奈。

その間、鳴海は推理を立てた。

（恐らく、付けてるのは真理先生を殺害した犯人。状況が不利になると見て追って来たんだろう）

「面白え・・・」

鳴海はそう呟くと、ニヤリと笑った。

「何がだ？」

「いやあ、犯人の顔拝めんのが何時になるか楽しみでな」

「変わってるな、お前」

「それはお前もだろ」

「ほお、どこがだ？」

「男の前で平然と全裸で寝れる所だ」

「そうか、見たのか」

「え？」

鳴海は頭に？を浮かべた。

「鳴海、後で折檻だからな。覚えておけ？」

「はあっ！？お前見られても気にしねえって言ったじゃねえかつ！？」

「それは別の私^{あいつ}だ。私は好きな人にしか見せないと決めている」

（やばっ、俺地雷踏んだ！）

鳴海は焦った。

「着いたぞ。警察署だ」

理奈はそう言っと、道路脇の駐車場へと入り、バイクを駐車スペースに停めた。正面には、北海道警察署と書かれた建物がある。

二人はバイクから降りると、その建物へと入って行った。

File 08・怪しい奴（後書き）

理奈の人格使い分けるの面倒になったよ。
警察署終わったっら本性出しちゃうか？

二人は署内に入ると、受け付けの女性警官に捜査一課の場所を訊ねた。

「あちらの階段を登って二階の通路を右に折れて突き当たりが捜査一課です」

と、階段を差しながら答える女性警官。

鳴海は礼を言うと、受け付けを放れてその階段を理奈と共に登り、通路を右に折れて突き当たりの捜査一課の部屋に入室した。

（あれ？）

と、誰もいない部屋の中を見回す鳴海。

「どうしたんでしょうね？誰もいないなんて」

「さあな。取り敢えずどつか座って待つてようぜ？戻って来るかもしれないねえし」

鳴海はそう言うのと、客人用のソファを見付け、そこに腰を掛けた。

「氷鮑さん、起きて下さい」

鳴海はその声に気付き、目を開けた。

「やべ、俺寝てた？」

「寝てました」

それより——と、理奈は向かい側を示す。その先には、スーツ姿の刑事が座っていた。

「あ、初めまして。氷鮑 鳴海です」

と、会釈をする鳴海。

「こちらにはどう言ったご用件で？」

その問いに、鳴海はある一枚の写真を取り出した。

「この方、ご存知ですよ？一年前に殺されたと言う山路 敏哉さん。犯人はまだ捕まっていないそうですね。その件について、詳し

くお聞かせ下さい」

「うーん、外部の者に捜査状況を話すのはちょっとねえ・・・」

「発見された時は滅多刺しだったそうですね」

「君、それは残酷すぎて一般公開していい情報だよ。それなのに何故君が知ってるんだい？」

「そんな事はどうでも良いじゃないですか。それより、当時の状況を詳しく話してくれませんか？」

その言葉に、刑事はムツとした。

「君、ちよつと来たまえ」

刑事はそう言うのと、無理矢理鳴海を取調室に連れて行った。

「それじゃあ話して貰おうか。君が何故、事件の状況を知っているのか」

「だから、そんな事どうだって良いだろ？」

「良くない、こういう事はハッキリしておかないと。それとも、言えない事なのかな？」

「あんた、俺を疑って？」

「事件の状況を知っているのは、我々警察と犯人だけ」

はあ——鳴海は溜め息を吐くところだった。

「やれやれ、仕方無いですね」

と、一枚の写真を机に置いた。

「こいつは東京で起こった事件の被害者の写真だ。俺はこの事件を調査してる探偵でな、警視庁でこっちで起きた事件の事を聞いてやって来たんだ。」

しかし、こっちに来てもまた取調室か。親父・・・否、警視總監に言いつけてやるか。そしたらお前、多分クビだぞ？」

「脅迫で逮捕しますよ？」

「脅しじゃねえし。なんだったら、本人に直接聞くか？」

鳴海はそう言うのと携帯を取り出し、父の携帯の番号を入力して通

話を押した。

「ほらよ」

と、刑事に電話を渡す鳴海。

電話を受け取った刑事は、応答した相手に訊ねた。

「もしもし、警視総監さんでいらっしゃいますでしょうか？」

「そうだが、あんたは？」

「私、北海道警察の者でして、今そちらの息子さんがお見えになつてゐるんです」

「そうか、無事に着いたのか。所で、何故わしの息子の携帯を？」

「それは息子さんが、警視総監さんの息子だと言つて、確認しろと私に渡したんです。て言うか、あなた本当に警視総監さんですか？」

「その通り、わしが警視総監の氷鉦 隆一だ」

「えっ……」

「どうした？」

「何でもありません！失礼しました！」

刑事はそう言つと、電話を切つた。

「いやあ、氷鉦さん、先程はとんだご無礼を。お詫びと言つちやなんですが、事件について詳しくお話ししよう」

刑事はそう言つと、鳴海を先程のソファへと案内する。

F i l e 0 9 ・道警（後書き）

随分まつたりだと思い始めた今日この頃。

File 10・脅迫

鳴海はソファに腰掛けた。

おかえり——理奈はそう言った。

「さて、詳しく話を聞かせて貰おうか」

鳴海はそう言い、山路 敏哉の写真を置いた。

「ではちよつと待っていて下さい」

刑事はそう言つと、部屋の隣にある捜査資料室に入つて行つた。

「お待ちせ致しました」

ドン——刑事は事件の捜査資料書を置いた。

「こちらに例の事件の事が詳しく書かれております」

刑事はそう言つて、資料書を開いた。

どうぞ——と、鳴海の方に向ける。

鳴海は資料を見た。タイトルは、『バラバラ滅多刺し事件』となつていた。

鳴海は資料に一通り目を通すと、

「成瀬川、行くぞ」

そう言つて、資料書をパタツと閉じた。

「行くつて、何処にですか？」

「山路 敏哉の家だ」

「解りました」

そう言つと、二人は捜一を跡にした。

道警から数Km離れたある場所に、ブルーシートが掛けられた一軒家がある。

鳴海は理奈と共に、バイクでその前までやって来た。

（あれ、何でまだブルーシートが？）

兎に角入ってみよう——そう思った鳴海は、その家に入つて行つた。

（ん？）

鳴海は玄関に落ちている一枚の紙切れを拾った。

『この事件から手を引け。さもなくば貴様の命は無い』
紙切れにはそう書いてあった。

「何ですか、それ？」

唐突にそう訊ねたのは理奈だった。

「うわっ！——鳴海は驚いて紙を落とした。」

「成瀬川、何時からそこにっ！？」

と、振り向き様に訊ねる。

「最初から後ろにいたじゃないですか。それより何ですかこれ？」
そう言っ紙切れを拾う理奈。

「この事件から手を引け・・・脅迫状ですね、これは」

「面白え、解決^{やっ}やろうじゃないか」

File 11・追跡者

道警、捜査一課。

「山路 敏哉の家でこんな物を見付けた」

そう言つて例の脅迫状を渡す鳴海。

「それと、殺された山路 敏哉に弟はいないか？」

「弟？否、いないな。だが、息子が確か東京の学校かなんかにいたと思つたけど・・・？」

「名前は？」

「山路^{やまじ} 拓也。それともう一人、敏哉には交際していた女がいました」

（山路の実父？）

「で、女の名前は？」

「高山 涼子。職業は刑事らしいですよ。警視庁にいますとか言つてたかな」

「一寸待てつ、敏哉の女は高城 真理じゃないのか！？」

「ああ、それは別れた妻の名だ。彼は高山 涼子と不倫関係にあり、離婚したんじゃないかと思う」

鳴海はニヤリと笑みを浮かべた。

「高城 真理が別れた奥さんで、高山 涼子が離婚の原因に成つた不倫相手・・・。高城 真理が敏哉を殺害したと見ても間違いないな」

「あつ、そうだ！」

刑事は思い出したかの様に叫んだ。

「山路 拓也は敏哉と高山 涼子の間に出来た子の名だ」

「マジかよそれ！？」

刑事は頷いた。

「まあ良いや。詳しい事は東京帰ってから調べる。じゃ」

鳴海は捜査一課を跡にし、理奈が待っているロビーに向かった。

「犯人像が浮かんだ、東京帰るぞ」

「えっ、本当ですか!？」

「ああ」

「解りました、行きましょう」

理奈はそう言って署を出て行った。そして、鳴海もそれに続く。

署を離れ、暫く走っていると、バイクの後ろを怪しい車が追っているのに気付いた。

「どうする鳴海？」

と、理奈が聞く。

「脇道に入って待ち伏せだ」

理奈は脇道に逸れた。後ろも同じ様に曲がった。

バイクと車は、互いにブレーキを掛けて止まった。

鳴海はバイクを降り、車へ近付く。すると、中から覆面をした人物が降りて来て拳銃を構えた。

「銃か。卑怯だぜ」

鳴海は両手を挙げた。途端、覆面の拳銃が銃声と共に吹っ飛んだ。鳴海が振り向くと、バイクに跨ったまま拳銃を構えている理奈の姿が在った。

「隠すつもりは無かったんだが、私はこう言う物だ」

そう言って懐から手帳を出し、鳴海に投げる理奈。

「FBI捜査官？」

「そう、私は日本で捜査をしているFBIよ」

「嘘だろ？だってお前、東大志望じゃん」

「それは、東大で大きな事件が起きてるって言う情報を得たから、生徒として入学しようとしてただけ。ってそんなのどうでも良いわ。そこのあなた？覆面を脱ぎなさい」

「待った」

鳴海は理奈の指示で覆面を脱ごうとしていた人物に言った。

「あんたの名、当ててやるよ。あんたの名は、高山 涼子だ」
覆面は顔を晒した。

「どうして解ったのかしら？」

File 12・狙われた探偵

「解るさ、そのぐらい」

鳴海は言つと、真相を語り出した。

此処で、高山 涼子について少し説明しよう。彼女は警視庁捜査一課に勤める刑事である。今回、遙々東京から彼等^{かれら}を追つて来た理由は、当然、彼等の捜査を足止めする為である。

「この山を追つていて一つ解つた事がある。一年前、あんたは殺害された山路 俊哉と不倫関係にあつた。そしてそれが発覚し、彼は当時奥さんだつた高城 真理と離婚をした。だがそれだけでは済まなかつた。

離婚後、二人の間で何らかのトラブルが発生し、高城 真理は山路 俊哉を殺害。それから一年後、今度は高城 真理が予備校の女子トイレの個室で滅多刺しにされ殺害された。犯人は恐らく、山路 俊哉と愛人関係にあり、彼を殺害した犯人を恨んでいる人物。――
そう、犯人はあんだだよ。高山 涼子さん」

その推理に、涼子は笑んだ。

「面白い推理だけど、物的証拠はあるのかしら。状況証拠だけでは私を犯人にする事は出来なくてよ？」

確かに、現段階では物的証拠が一つも無い。凶器さえあれば指紋が検出出来る可能性があるのだが・・・。

「・・・・・・」

俯く鳴海。

そこへ、彼の携帯にコールが入つた。

鳴海は携帯を取り出し、応答する。相手は警視庁捜査一課の高宮 繁治警部だつた。

「高宮さん、何か御用で？」

高宮は鳴海に、凶器が現場付近の川の中から見付かつた事を伝えた。

川の中では、血液反応は出ても指紋は取れてしまっているだろう。
「それとな、被害者以外の血液も検出されたんだ」

鳴海は思考を巡らせた。

「有り難う」

言って鳴海は、電話切って仕舞った。

「高山さん、現場付近で凶器が見付かったそうですよ」

「そう、見付かったの？でも川の中じゃ指紋は消えてしまっているわね」

「ついでにこんな事も言っていました。凶器から被害者以外の血液が出た、と。そこから考えられるのは一つだけ。犯人も怪我をしている」

沈黙が場を支配する。

「所で涼子さん、その頬の傷、事件の日からありましたけど、どうなさったんですか？」

「ああ、これは木の枝に引っ掛けてね」

「違う。それはナイフで斬った痕だ」

言葉に詰まる涼子。

「恐らくあんたは、被害者を殺害しようと現場に呼び出し、持っていた凶器で襲い掛かったが、抵抗されて自分も怪我をしましたったんだ」

「・・・憶測でものを言うのはやめて頂戴。私の血液と凶器の血液が一致しない限り――」

「憶測じゃない！」

涼子が言い終わる直前、鳴海が掻き消す様に発した。

「あんたは自ら自白してしまったんだ」

疑問符を浮かべる涼子。

「俺は先刻、凶器が見つかったと言ったな。だが、何処で見つかったか迄は言っていない。何なら、その時のメッセージ聞かせてやるうか？」

言って鳴海は、ポケットから携帯レコーダーを取り出し、少し巻

き戻して再生した。

涼子の声がレコーダーのスピーカーから聞こえる。

『そう、見付かったの？でも川の中じゃ指紋は消えてしまっているわね』

ガチャ——鳴海は停止ボタンを押し、ポケットへ仕舞った。

涼子はその場に崩れ、膝を着いた。

「卑怯よ、あなた」

「恐縮です」

そう言った瞬間、鳴海の後頭部にサーチライトが現れた。

「鳴海さんっ、隠れて！」

「えっ？」

と振り向く鳴海。

パアンツ！——何処からか銃弾が放たれ、それ鳴海に向かって飛来する。

「危ない！」

理奈が咄嗟に跳び、鳴海を突き飛ばした。

「うっ！」

銃弾に胸を貫かれ、呻き声を上げて地面に伏す理奈。

「成瀬川！？」

しかし反応が無い。撃たれたショックで気絶している。

（この角度は！）

鳴海は銃弾が飛んできた方向を計算してそっちを向いた。

空に、一機のヘリコプター！

其処から鳴海がよく知る人物が、彼をサーチライトで狙っていた。

（アイツも関わってたのか！？）

カチ——鳴海の後頭部に銃口が当てられる。

「油断したわね、氷鉦 鳴海」

鳴海は両手を挙げた。

「口封じに俺を殺すのか？」

「あなたには真相を知られちゃったからね。あなたの事だから、此

処で殺らなきゃ、警察に言うでしょ？」

此処迄、か。

鳴海は死を覚悟した。

パアンツ！——銃声と共に、涼子が倒れた。

振り向くと、瀕死状態の理奈が、拳銃を構えていた。

「鳴海さん、逃げて・・・」

「貸せ！」

鳴海はローリングして拳銃を理奈から奪い取り、自分を狙う者に銃口を向けた。

「無理よ。拳銃で遠くのを狙うなんて・・・」

「そんなのやってみなきゃ分からねえさ」

言って鳴海は、引き金を引いた。が、弾は外れた。

ある人物から携帯にコールが入った。

鳴海は携帯を取り出して応答する。

「どう言うつもりだ！？」

すると電話の相手は「死ねば良かったのに」と発した。

「何でお前が・・・！？」

「ふっ、そんな事お前には関係無え。兎に角そこを動くなよ？動いたら女の命は無え」

鳴海は理奈をチラリと見た。

「なあ、一つ、良いか？」

「何だ？」

「救急車、呼ばせてくれ」

「ほお、自分の事より女の心配か。駄目だ、お前たちは此処で死ぬんだ」

（クソ！）

鳴海の携帯を握る手に力が入る。

「さあどうする？怖きゃ逃げてても良いんだぜ？その代わり女の命は無いがな」

為す術が無い。動いたら理奈が死ぬが、動かなかつたら二人とも

死ぬ。絶望したつ、^{ダブルバインド}二重拘束に絶望した！

巫座戯ている場合では無い。この状況を打開する策を真剣に考えなければ。

鳴海は脳をフル回転させて考える。

「鳴海さん、逃げて下さい」

「それは出来ない。そんな事したらあんた死んじまうだろ」

「でも、このままジツとしてたら二人ともお陀仏だよ？」

理奈の言う通りである。だが策が無い訳でも無い。

一か八か、鳴海は行動に出る。

拳銃を軽く上に投げ、落ちてきた所で、狙う者に向かって思いっ切り蹴り飛ばす。

拳銃は猛スピードで、摩擦で火を吹きながら狙う者目掛けて飛んで行く。

「何をするかと思えばつ、そんな物が当たる筈がつ——」

当たった。拳銃が狙う者の額にクリティカルヒット。狙う者は意識を失った。

脅威は去った。

死ぬ事も無くなった。

鳴海は通話を切り、110番した。

その後、やって来た警察に因って、涼子と狙う者とその一行は逮捕された。

北海道のある病院。

理奈は手術室で治療を受けている。

その手術室の前の椅子に、鳴海は腰掛けている。

（成瀬川、無事でいてくれよ）

鳴海は目を瞑り、手を組んで祈っていた。

その時、手術室のドアの上にある手術中のランプが消えた。ドアが開き、ドクターが出て来る。

鳴海はすつくと立ち上がり、

「成瀬川は！？」

ドクターに訊ねる。

ドクターはマスクを外して「手術は成功です」と答えた。

「後は回復する迄、暫く様子を見る事ですな」

言ってドクターは去って行った。

鳴海は再度椅子に腰掛け、安堵の溜め息を吐いた。

手術室からベッドに寝かされた理奈が病室へと運び出された。

外科病棟、病室。

麻酔が切れ、理奈は目が覚めた。傍らには鳴海の姿がある。

「よっ」

と発声する鳴海。

「良かったな、生きてて。医者の話したと、あと1cm銃弾がズレてたら心臓に当たって死んでたそうだな」

理奈は胸に手を置いた。包帯が巻かれている。

「あの、犯人たちは？」

「捕まったよ、道警に。所で、東大で事件がどうか言ってたけど」

「あのさ、その事なんだけど、忘れて？」

「えっ？」

「あなたが興味持つの解るけど、こっちは危ない仕事だから」

「何だよ？手伝わせてくれたって良いじゃないか。君だって俺を手伝ってくれただろ？」

「・・・解った。一緒にやりましょう」

T o b e c o n t i n u e d . . .

F i l e 1 2 ・狙われた探偵（後書き）

狙う者

彼の名前判ったでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7647b/>

氷鉋鳴海の事件ファイル

2010年10月8日15時53分発行